

令和7年度入学 社会福祉学部 一般選抜・後期 試験問題の出典

種別	大問番号	著者名	著作物名	書名等	版元
小論文	一	岸見 一郎	つながらない覚悟	2023年 pp.241-246より 一部改変	PHP研究所

令和7年度 一般選抜・後期

社会福祉学部

小論文 (90分)

注意事項

- 1 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
- 2 この冊子は、2ページあります。なお、下書き用紙が2枚あります。
- 3 試験中に問題冊子及び解答用紙の印刷不鮮明、ページの脱落などがあった場合は、手を挙げて試験監督者に知らせなさい。
- 4 解答は、必ず黒鉛筆(シャープペンシルも可)で記入し、ボールペンや万年筆などを使用してはいけません。
- 5 解答用紙には、氏名及び受験票と同じ受験番号を忘れずに記入しなさい。
- 6 解答は、必ず解答用紙の指定された箇所に記入しなさい。
- 7 下書きの必要があれば、下書き用紙を利用してかまいません。
- 8 試験終了後、問題冊子と下書き用紙は持ち帰りなさい。

次の文章を読み、あとの問いに答えなさい。(配点 200 点)

人は他者とのつながりの中に生きている。自分の存在は共鳴という仕方で他者に必ず影響を与え、何もしていなくても必ず他者に貢献できる。

他者に貢献することもあるが、その一方で、必要な時には他者に助けを求めなければならないことがある。誰もが最初から自立できるわけではない。生活面においては、親の不断の援助が必要だった子ども時代を経て、やがて多くのことを自分でできるようになる。

ちょうど、グライダーが空を飛ぶ時に、他の飛行機や車に牽引^{けんいん}されて飛び、その後、空に舞い上がってからワイヤーを切り離して滑空するようなことである。いつか自立しなければならない。しかし、初めから自力で滑空できるわけではない。

初めから何もかもしてもらおうと思うのは依存なので、できるところまでは自分でしなければならない。他者に依存して生きることを当然だと思ふ人でなければ、援助を求める前に十分するべきことをしているはずである。それどころか、十分すぎるほど頑張る人もいるが、できないことについては他者から必要な援助は受けていいし、受けなければならない。

一度、ワイヤーを切り離して滑空してからも、他者の援助が必要になることはある。まったく誰からも援助されずに一人で生きることは難しい。これは子どもだけでなく、大人も同じである。自分が⁽¹⁾できないことをできないと認め、それを人にいえるのも自立である。自分の価値は生きていることにあるのだから、そのことで価値が減じることにはならない。

他者から援助されるからといって、すぐに他者に依存するようになるわけではない。誰かが立ち上がろうとする時にさっと手を差し伸べることはあるだろう。そのような行為は、その人の自立心を奪うことにはならないし、手を差し伸べられたからといってその人が依存的になって、二度と一人で立ち上がろうとしなくなるわけではない。

他者に援助を求められるようになるためには、他者は「仲間」であり、必要な時にはその仲間に援助を求めようと思えなければならない。誰もその援助を拒んだりしない。

心筋梗塞で入院した翌年、私は冠動脈^{かんどうみゃく}のバイパス手術を受けた。心臓を止め人工呼吸器につないでの大手術だった。その際、胸骨を切り開いたのだが、ワイヤーでつなぎ縫合した傷跡を保護するために胸にバンドをつけなければならなかった。

退院後、外出時に満員電車に乗らなければならないことがあった。苦しくて席を譲ってほしいと思ったことがあった。夏だったので本来は肌に直接つけるバンドを服の上につけていたが、胸のバンドに気づく人があっても、それがどういうものかは誰にもわかってもらえず、席を譲ってもらえなかった。

実のところ、「譲ってほしい」といえばどう思われるだろうかと思って言い出せなかったのである。よく考えるまでもなく、もしも反対の立場で席を譲ってほしいといわれたら、理由すらたずねないで席を譲るはずなのである。

私がカウンセリングをしてきた時の経験からいえば、男性が相談にくることはあまりなかった。お

前の話などなぜ聞かないといけないのかと思う人もいただろうし、自分の弱みを見せたくないという人もいただろう。どれほどつらくても自力で何とかしなければならないと思い、我慢に我慢を重ね、⁽²⁾ある日、朝起きたら身体が動かなくて出社できないというようなことになる。追い詰められ死をも考える人にとって、助けを求めようと思えるかは生死を決める。必要な時は他者に助けを求める勇気を持たなければならない。

仕事であれば結果を出さないといけないが、初めから、あるいはずっと望む結果を出せるとは限らない。心筋梗塞で入院していた時、近く出版することになっていた本の校正紙が届いた。私は編集者に入院していることを隠し、校正した。入院中なので当面、校正はできないといったら二度と仕事がこないと思ってしまったのである。しかし、入院していることを話したら、締め切りを延ばしてもらえただろう。もしもどんなことがあっても期日前に校正を仕上げるようにというような出版社であれば、こちらから仕事を断ってもいいくらいなのに、無理をして校正をした。

(中 略)

今、当時のことを振り返ると、この時私が経験したことは、対人関係全般に当てはまる。入院中なのに校正できないといったら仕事を失うかもしれないと思ったのは、支配への屈服である。体調不良などで仕事ができない時でも休めない人も同じである。

今はどんなことがあっても出社するようにと命じるような会社はないだろうが、もしもそのような会社があるとすれば、つながりの強制である。

自立している人は病気になった時などに、何が自分にとって重要であるかがわかっているのだから、支配に屈することはない。仕事については、今は貢献できてもいつまで仕事ができるかはわからない。しかし、自分の存在で他者に貢献できることを知っているのだから、必要な時には他者の援助を求めることができ、仕事上だけのつながりには屈せず、必要があれば切ることができる。

真のつながりは、自己中心的な支配や依存関係ではなく、一人一人が自立し、しかもつながっていて、必要な人は援助し、必要な時は人に援助を求めることができる。そのような真のつながりを築けることを知れば、どんなに苦しい時でも生きていくことができる。

(岸見一郎『つながらない覚悟』、PHP 研究所、2023 年、pp.241-246 より、一部改変)

問 1 下線部(1)「自分ができないことをできないと認め、それを人にいえるのも自立である」と作者が述べる理由を、130 字以上 150 字以内で説明しなさい。

問 2 あなたの友人が、下線部(2)「どれほどつらくても自力で何とかしなければならないと思い、我慢に我慢を重ね、ある日、朝起きたら身体が動かなくて出社できない」という状況になっていた場合に、他者に援助を求める勇気を持つことを促す関わり方にはどのようなことが考えられるか。本文の内容を踏まえ、あなたの考えを理由とともに、600 字以上 800 字以内で述べなさい。